

第三十九回 宮島全国短歌大会

沖 ななも 先生 選

入賞作品

特別賞

広島県知事賞

「濁音で鳴く鳥がいる」子は言ひて大き樟の天辺を見上ぐ

(二七二) 広島 縄田 妙子

(評)

何の鳥だろう、カアカア鳴くとかピイピイ鳴くとかではなく、「濁音で鳴く」と表現した子どもの感性もナイーブで、それを捉えた作者の感性もまた鋭い。発想の意外性に惹かれた。

日本歌人クラブ賞

知らぬ間にパパに隠れて恋をして娘は彼が一番になる

(十三) 埼玉 加藤 健司

(評)

パパのことが一番好きだったはずの娘も年頃になれば恋をする。たぶん父親には内緒にしてきたのだ。パパに隠れてと言っているので母である作者はうすうす知っていたのかも知れない。父親と母親との違いも微妙に表現されている。

広島県歌人協会賞

夢うつつ天神様のお祭りで綿菓子買った少女 もう喜寿ですワ

(三九二) 広島 山本友栄

(評) 天神様のお祭りで綿菓子を買って他愛なく喜んでいた少女。あれは現実だったのか。夢のように思われる時間が経って、もう喜寿。「喜寿ですワ」という結句がとてもユーモラス。「買った」を「こうた」とルビしたところも効果的だった。

山口県歌人協会賞

微熱の夜ひよつこり父は夢に出て洗濯物を干してゆきたり

(四七九) 広島 村上直子

(評) 風邪か、ワクチンの副反応か、微熱でうつらうつらしていたときの夢。こんなとき父や母が出てくるのはよくあるが、洗濯物を干していったところが新鮮だった。作者が、熱のためにできないでいた洗濯物を気にしていたのかもしれない。

宮島全国短歌大会実行委員会賞

綾取りの糸やわらかく母の手に移りて「川」に春陽さす部屋

(二六二) 山口 二宮信子

(評) 最近綾取りをすることも減ったが、高齢のお母さんだったなら楽しみだろう。高齢者には指の運動にもなる。綾取りの基本の形「川」。柔らかな春の陽が差している。作者が子どもだった頃お母さんと綾取りしたことを思い出しながらの、微笑ましい場面。

## 広島県教育委員会賞

うつそりと着膨れて誰にも会わぬ日は冬の底いのアノマロカリス

(三七五) 広島 木下 陽子

(評) 着ぶくれて、外出もせず、人にも会わず、なんとなく鬱々した日。まるでアノマロカリスになったみたい、と思う。アノマロカリスは古生代カンブリア紀の海にいた生物。奇妙なエビと言う意味らしい。着膨れているあたりがエビの殻を連想させる。冬の底は、時間の底でもある。

## 廿日市市長賞

雨後の野の光る滴が甘そうでカラスビシヤクの舌のヒュルルル

(四四二) 広島 森 本 直 美

(評) カラスビシヤクはひよろりとした舌のようなものが出ている。雨の滴がきらきらして美味しそうだから、その舌がヒュルルルと伸びてぺろりと舐めそう。発想が新鮮だったこと、また結句のオノマトペが爽やかだったこと。とてもユニークな作品になった。

## 廿日市市教育委員会賞

雪の色をあらはすために浮世絵の刷師は十枚の版木を使ふ

(三七三) 愛知 清 水 良 郎

(評) 白い雪なら一色か、あるいは色を付けなくてもよきそうなものだが、そこは芸術家のこだわり。十枚もの版木を使う。それを知った時の作者の驚き。たった一色に拘る。あるいは無色に拘る職人さん。そこまで拘る生き方をしてきたらどうかと顧みる思いもあつたか。

## 巖島神社賞

蒔いていくチコリー、ルッコラ、リーフレタスあつ、口笛を吹いてしまった

(一一一) 広島 津村 スマコ

(評)

チコリー、ルッコラ、リーフレタス。ラ行の多い野菜。口の中で次はルッコラ、リーフレタスなどと呟いているうちに口の形が似ているので、口笛になつてしまう。音感だけで通しているところがシンプルな歌になつた。口語の軽やかさも魅力。

## 宮島観光協会賞

横断をせよと車が止まるから段差も見ずに転んでしまう

(一三四) 山口 藤井 沙千子

(評)

横断歩道の際に立っていると車は止まってくれぬ。「せよ」と命令したわけではないが、目の前に止まられると、急かされるような気がしてついつい段差に気付かず転んでしまった。あたかも止まった車のせいになっているようでユーモラス。

## 中国新聞社賞

正面の月に昇つてゆくやうな阿波の駅前エスカレーター

(二九〇) 山口 光井 加代子

(評)

最近では長いエスカレーターがある、ことに駅前ならば。エスカレーターに乗った。偶然だろうが、月に向かって昇っているやうな、かぐや姫もこんな感じかと、いつときを楽しむ。季節や時間が違えばこうはいかない。これも一期一会なのである。

## NHK広島放送局賞

「父さんの仕事みつかりますように」幼き文字がしゃもじに踊る

(一〇八) 広島 山口 順子

(評)

けなげな子供。幼い子供でも親の窮地を感じているものだ。しゃもじはご当地のもの、七夕のように願いを書くというような催しがあるのだろうか。文字が躍るとは、あまり上手ではない、幼い子供の文字ということだろう。

## 中国放送賞

もう一度枢の母に問うてみる私が娘でよかったですか

(三四七) 山口 石井 久美子

(評)

母と最後の別れ。もう一度というのだから、病氣療養中にでも聞いたことがあったのかもしれない。自分はいい娘だったのか、母からみてどうだったのか。きつと母は、大きく頷いてくれたはず。なかなかこうした反省をする娘はいないから。

## 広島テレビ賞

青梅が風待月に累々と上枝下枝に湧きたちてくる

(四三四) 北海道 鎌田 博文

(評)

「風待ち月」とは旧暦六月のこと。六月になるとそれまで小さくて目立たなかった青梅が急に大きくなって実りをみせる。そのエネルギーな様子を湧き立つと書いている。思いがけなくたくさんの実が、上の枝にも下の枝にも生っているのに気付くのだ。

## 広島ホームテレビ賞

サミットも無事に終わって帰途につく警官の両手に広島土産

(五二二) 広島 保木本 明 美

(評) 一大イベント、緊張のイベント。サミットの際は全国から警備のために警察官が集められた。無事済めば一人の勤め人に戻る。同僚にか家族にか、滅多に来ることがない広島土産を両手に。一仕事終えた安堵が伺える、なにかほっとするような光景だ。

## テレビ新広島賞

酔うほどに首のケロイド朱に染まる語れぬ父に傷痕は動めく

(五八八) 山口 安 久 裕 子

(評) 普段はそれほど目立たないのかも知れないが、酔って肌が赤くなると目立ってくる。その傷跡がどれほど父の心のなかを重くしていたか、黙っていても分かる。あえて語らないからこそ、その傷は深い。

優秀賞

首脳らへのシャッターチャンス待つ記者の粘り強さがニュース届ける

(七三) 広島 織田 卓 荘

ツーランと渾名の由来知らねども亡き夫の長き飲み友たりき

(二五〇) 山口 山代屋 貞 子

パソコンのゴミ箱すべてを空にするぴしゅつと水鉄砲撃つ音がした

(二八七) 山口 倉 谷 節 子

由緒書読めばどこもが原爆で再建とある広島 of 社寺

(二〇九) 愛媛 園 部 淳

恋のはじめの一葉ならん澄まし顔に微笑む母と照れたる父と

(二二五) 広島 若 林 美知恵



正確に席に近づき離れゆく配膳ロボットこわごわ見入る

(二二四) 広島

岡田 真知子

廃屋の人影も無き窓辺にも団欒の灯り漏れし日ありしか

(二三七) 岡山

岡田 清

酒店とパチンコ屋とを飲み込みてデザイン会社の第四工場

(二八八) 広島

清川 英子

笑むこともなくて過ぎゆく夕間暮れ「月がきれいだ」と夫の声する

(三二〇) 広島

新井 邦子

診察を待ちいる少女さんすうのドリルに無心窓辺の椅子で

(三三〇) 山口

尾崎 重子

「みてる」とは中国地方の方言よ広辞苑にありなんだかうれし

(三七二) 広島

古谷 明子

「朝食抜き」と大きく書いて娘は帰る明日は私の胃カメラ予約日

(三八二) 山口 正木 紀子

広大な花野なるべし大輪のカサブランカを出で入る蟻ん子

(三九〇) 山口 藤 伊花子

全身でリズム奏づる愉しさをパーカッションの子は伝へ呉る

(四九六) 滋賀 浅 野 志津子

長袖の中に終生傷かくし原爆語らず友は逝きたり

(六〇四) 広島 高 野 和子